6-9 唯物史観の歪曲―弁証法の欠落　　上記「6-7」も参照。

１、「この連中の全部に欠けているのは、弁証法です。」「形而上学的な両極的対立はただ危機においてしか存在しない」

「この連中の全部に欠けているのは、弁証法です。彼らはいつでも、こちらに原因、あちらに結果をみるだけです。これが一つの空虚な抽象であること、現実の世界ではこのような形而上学的な両極的対立はただ危機(クリーゼ)においてしか存在しないということ、そして、全体の大きな経過は相互作用――はなはだしく不等な諸力の相互作用であり、これらの力のなかでもとくに経済的運動が最も強力な、最も根源的な、最も決定的な力であるとはいえ――の形態で進行するということ、ここには絶対的なものは何もなく、いっさいが相対的だということ、このことを彼らはどうしてもみないのです。彼らにとってはヘーゲルは存在しなかったのです。」

⑤-[152]P355下1～全部（コンラート・シュミットあてのエンゲルスの手紙1890.10.27)

２、「このほかには、もう一つだけかけている点がありますが、…」

「このほかには、もう一つだけかけている点がありますが、これはマルクスのものにも私のものにも普通じゅうぶんに強調されていないことで、この点にかんしては私たち両人に等しく責任があります。つまり、私たち両人は何よりもまず、経済的な基礎事実から、政治的・法律的・その他のイデオロギー的・諸観念とこれらの観念によって媒介された諸行動とを**導きだすこと**に重点をおいてきたし、また**おかなければなりませんでした**。そのさい私たちはさらに、内容的な面にかまけて形式的な面、すなわち、これらの観念等々が成立してくる仕方様式の面をなおざりにしてきました。じっさいこのことが、論敵に誤解ないし歪曲の絶好の機会を与えてしまいました。なかでも、パウル・バルトは、その適例です。……

私はここでは、問題のこの側面をただ示唆できるだけですが、私は、われわれはみなこの側面をおろそかにしすぎてきたように思います。よくある話ですが、はじめはいつも、内容に気をとられて形式のほうはおろそかにされるのです。……

イデオローグたちの次のようなばかげた考えも、これと関係があります。それは、われわれが歴史のうちで或る役割を演じているさまざまなイデオロギー的領域に自立的な歴史的発展を認めないというので、われわれはまたそれらの領域にどんな**歴史的作用**をも認めていないのだ、という考えです。この根底には、原因と結果とを、固定的に対立しあった両極とする、ありきたりの非弁証法的な考えが、交互作用のまったくの忘却があります。ある歴史的な要因が、ひとたび他の、けっきょくは経済的な諸原因によって生みおとされると、こんどはまた反作用するということ、それの周囲や、さらにそれ自身の原因にたいしてさえ反作用を及ぼしうるということを、お偉方は、しばしばほとんど故意に忘れるのです。……」注)……は青山の省略

⑤-[153]P357～9全部（メーリングあてのエンゲルスの手紙1893.7.14)。